

夏草の賦

司馬遼太



夏草の賦

司馬遼太郎



文藝春秋刊

夏草の賦

昭和四十三年一月二十五日 第一刷
昭和四十七年九月一日 第十六刷

定価 五〇〇円

著者 島馬 遼太郎

発行所 窪ノ原 雅春

発行所 窪ノ原 雅春 秋

東京府千代田区有明三丁目3番地
窪ノ原 雅春 (代表)

万一乱丁・落字のものはお取替えいたします

印刷・凸版印刷株式会社 製本・凸版製本

©1968 RYOTARO SHIBA printed in Japan

0093-300571-7384

目 次

岐阜	7
国分川	31
桑の実	56
中村の御所	78
かたばみの旗	104
覇者の道	140

運命	175
天下	223
若者	256
遠征	284
戸次川	298

装幀
御正伸

夏
草
の
賦

岐阜

織田信長が、尾張から美濃へ進出し、岐阜城を本拠にした早々のころのことである。岐阜城下で美貌のむすめといえ、

——内蔵助屋敷の菜々殿。

と、たれしもが、まず指を折った。当時、岐阜は城下町が造営されつつある真最中で、大工、左官、屋根師、道路人夫などが近国から群れあつまり、終日槌音がたえず、天下にこれほど活気のある街はなかったであろう。

「みたか」

と、その働き人どもでさえ、目をそばだて袖をひきあって菜々のことをうわさしあった。事実、菜々が侍女ひとりをつけて外出するときなど、辻々で槌の音がやみ、みな作業場で息をひそめ、彼女の通りすぎるのを黙送した。

「あれほどの姫御料人を、どなたが嫁になさるのであるう」

と、みなかたずをのむような表情で、ささやきあった。斎藤内蔵助は、織田家の侍である。ただし譜代ではな

く美濃の地侍の出で、信長が美濃をわがものにしたときにあらたに仕えた。このため屋敷は城ちかくにはなく、城南のはずれにある。

菜々は、その妹である。

「たいそうなうわさらしい」

と、兄の内蔵助はある日、菜々をからかってみた。

「そうでしようか」

菜々は、利口者だから、笑って話題をはずそうとした。うなじが、ほそい。血すじが透けてみえるほどにしろいそのあたりを見てみると、兄の内蔵助でさえ、ただならぬ思いが、ふときぎしてしまふ。

——ゆくすえ、たれの所有になるやら。

内蔵助は、この妹のからだを抱く者にふと嫉妬をさえおぼえた。

「菜々は、どのようなおとこを婿にもちたいか」

「兄上のような」

と、菜々はぬけめなくいった。言ってから、存外、本気でそうおもっている自分を知った。菜々のみるところ、内蔵助ほどの男は織田家の家中でもざらにはいないであろう。世間で評価されているのは内蔵助の槍先の武辺のみであったが、しかしこの兄の才能は、そのような一騎駆けの武者ばたらきよりも、数千の兵を進退させる大将としての能力にあるだろうとおもっている。

「おれのような男か」

兄は、満足したらしい。内蔵助自身そうおもっているだけに、このところ、くだらぬ男からの申し入れを片っぱしからことわり、そのためにあちこちで無用の恨みまで買っている。

「女の運は、亭主できまるからな」

と、内蔵助がいうと、菜々は小さく首をひねった。

「そうでしょうか」

異論がある、というよりも、女の生涯のはかなさを、ひとことで片付けてしまう兄の神経の粗放さが、多少気に入らない。

「そういうものだ。老いては子できまる」

と、言いかさねた。

(そんなことはない)

菜々は、兄のいうとおりだと思いつつもそうではない自分でありたかった。なにがしかの自主的な冒険が、女にもゆるぎされていいのではあるまいか。

翌日、妙な使者がきた。

妙、というのはあたるまい。なぜならば、来訪者は隣家の主人である。

明智十兵衛光秀といった。

「それがし」

と玄関で一声高くよばわる。それだけで事がすむほど、光秀はこの菜々の兄の斎藤内蔵助とは親しい。

「やあ、明智殿でありますか」

内蔵助は、この隣家の主人の来訪がなによりもうれしい。うまも適う。それに光秀ほど斎藤内蔵助の力働を理解してくれている者もまれであった。土はおのれを知る者のために死すという。ときに、戦国の世である。たれしもが才能と力働を競い、認められることをのぞんでい。斎藤内蔵助といえども、同様であった。

おなじ、美濃の産である。おなじく織田家にあつては新参であった。光秀は年少のころにいわゆる「道三崩れ」があり、斎藤道三がその義子のために討たれるとともに美濃を脱出し、諸国を浪々した。のち越前へゆき、朝倉家の客分になったが、そこを見かぎり、ちかごろ織田家に仕え、信長にその器量を見出され、新参というのに家中でも目をそばだたせるほどの出頭人になっている。光秀と信長の正室濃姫とはいとこ同士のあいだがらになるが、光秀の異例の出頭ぶりはそういうことよりも、かれの政治能力と、鉄砲隊の指揮方法のあたらしさを信長は見こんだのであろう。

内蔵助は、光秀を座敷に招じ入れ、自分は一段さがつて縁側にすわった。朋輩ながらそういう礼を内蔵助がとるのは、とらせるだけの器量が、光秀にはあるらしい。

「つかぬことを、ききにきた」

と、光秀はいった。

「はて、いかなる」

内蔵助は猪首を立てた。

「いやさ、菜々どののこです。あれほどの御器量ゆえ縁談は多いことでありましょうな」

「多いと申せば」

「左様、多いことであろう。しかしまだいずかたともお約束までは至っておらぬとききますが、そうでありますような」

「まず」

「いや、安堵した。ところできょうまかり出たのは、そのことでごさる」

「とは？」

「いやいや、大まじめになってもらつてはこまる。このはなしはごく内々に。いわば茶のみばなしとして聞いていただきたい。お断りくださるならばさっさとお断りくだされ。なにぶん縁談がおもしろすぎて」

「おもしろすぎる？」

「その前にうかがいたいのが、内蔵助どのの菜々どのを、やはり織田家の家中に嫁がせたいと思つておられるか」

「そのほうが、順当でありますよ」

まさかこの戦国の世に、敵国の武士に嫁がせることもできまい。嫁入りのさきなど、自然、せまい家中社会にかぎられてしまうのである。

「もし、もしでありますよ。唐・天竺の王室から嫁にほしいと申してきたら、どうなさる」

「これはどうも」

話が、とつびすぎる。外国の王子が求婚すればどうするという設問など、現実感がなさすぎて返答にこまるのである。

現実感がないだけに、内蔵助はつい、いいかげんな答えをした。

「それは相手の男ぶり次第であり、当方の菜々の心次第でごさる。唐・天竺であろうと、拙者には、いなやはない」

「それで安堵した」

光秀ははじめて笑った。さすがに軍略家らしいはなしの進め方にまるで城攻めのような段取りがあり、こまかい計算が働いている。

「とすると」

斎藤内蔵助は、不安になってきた。本当にシナやインドの王子が菜々を貰いにきているのではないか、と思われはじめたのである。

「まことでありますか」

「おびえましたな」

十兵衛光秀は、品のいい童顔に微笑をうかべ、内蔵助をからかうようにいった。

(油断がならぬ)

内蔵助はおもうのである。光秀は二十代から三十代のなかばになるまで諸国を放浪し、天下の風俗・地理・政情にあかるい。堺にもいたことがあるという。堺の貿易

商を通して南蛮人や唐人ともつきあい、海のむこうの事情にまで通じているという人物である。自然、光秀の縁で唐・天竺の王子が縁談を申し入れて来ぬともかぎらぬのである。

「あつははは」

光秀は無邪気に笑い、手をあげて膝のうえの蠅を追った。内蔵助のあわてかたがおもしろかつたらしい。

「じつをいうと、唐・天竺ではない。海のむこうはむこうであるが、本朝のうちじゃ。土佐でありますよ」

(鬼国。……)

内蔵助がとつきに思ったのはそのことばである。土佐は鬼国であるという。人のかわりに鬼が棲む、といわれるほどに人間世界から遠い感じがする。王朝時代は遠流の地であったし、土佐へ流されるといだけで人々はこの世との訣別にちかひ悲しみをもった。人の顔や風俗もちがっているばかりか、馬なども犬のように小さい、とも斎藤内蔵助はきいている。そのような国に、大事な妹をやるわけがない。

が、光秀に、「唐・天竺でも拙者はいなやを申しませぬ」と大見得をきつた手前、すぐにはことわりかねた。

「先方は、どなたでござる」

「長曾我部元親と申し、いまでこそ土佐一国を切り取り中であるが、ゆくすえ四国を併呑し、天下を望もうというほどの英雄でござる」

「なるほど」

いかに英傑でも、美濃という、日本の中央部にいる者が、遠い田舎に妹をやることはあるまい。

「とにかく、妹がどう申しますか、その氣持を確かめた上で」

「左様、無理押しもなるまい」

光秀はこのあと、ふたことばかり重要なことを言い、言いすてるようにして帰った。

内蔵助は、縁側で腕を組んだ。庭のくすの木の枝を渡つてゆく風が、すでに秋である。

「葉々、庭へまわれ」

奥へ大声で呼ばわり、自分も草履をはき、庭へ出た。

作り庭ではなく、長良川の土堤とのあいだの狭い空地に、梅、桐、矢竹などの実用になる樹を植えちらしてあるにすぎない。葉々が裏へまわり、梅の木の下から姿をあらわした。

「話がある」

内蔵助は、光秀と同じ話法を用いた。もし唐・天竺の王子から求婚されたとすればゆくか、という質問からはじめた。

「ゆく」

と、意外にも葉々は平然といった。

「冗談ではないぞ」

「はい。冗談では答えておりませぬ」

けろりというのである。

葉々の意外な返事をきいて、

(おれはよほど風変りな妹をもったらしい)

と、斎藤内蔵助はおもった。

風変りにちがいない。この戦国の当時、美濃から土佐へ嫁にゆくなどは、二十世紀のこんにち、日本からアフリカの奥地の酋長のもとに嫁にゆくというよりも、さらに日常感覚からの飛躍であろう。

「本気か。狐でも憑いておるのではないか」

と、兄の内蔵助は何度も念を押した。変りすぎている相手の土佐の酋長の、顔も気だても知ったのことならともかく、ただいきなり嫁くという。

「わからん」

内蔵助は、葉々の顔をのぞいた。

風変りといえば、この内蔵助・葉々の斎藤家にはよほど風変りな血が流れているらしい。

以下は余談だが。――

この斎藤内蔵助のちに光秀の侍大将になり、光秀の反乱発起とともにやむをえずそれをたすけ、その敗死とともに身をほろぼすのだが、かれが晩年に設けた娘にお福というのがあった。

お福は成人し、おなじ美濃出身の稲葉正成に嫁した。

正成は、秀吉に命ぜられて小早川秀秋のおつき家老になつた人物である。官は、佐渡守であつた。反逆者として

死んだ斎藤内蔵助の娘としてはまずまず幸福な婚家といえるであろう。ところが、関ヶ原の役後、稲葉正成は浪人し、故郷の美濃に帰って隠棲した。

このころ徳川二代将軍秀忠に嫡子(竹千代・のちの家光)がうまれ、その乳母を公募することになった。公募のための高札が京の三条大橋に立てられた。

お福はこのうわさを美濃できき、夫をすてて京へのぼり、京都所司代をたずねて、

――一介の浪人の妻でございますが、わたくしでよければ、

と、名乗りをあげている。普通人の日常感覚でいえば、よほど奇矯で大胆な飛躍行動といえるであろう。

京都所司代板倉勝重はお福を引見し、その容貌の典雅さ、皮膚のつややかさ、生来無病であるという健康さを買ひ、さらに斎藤内蔵助の娘で稲葉正成の妻であるという素姓のよきをも買ひ、さっそく江戸へ報告すると、幕府も異存がなかった。お福は、家光の乳母になった。のち、徳川家における最大の権威家といわれた従二位春日局が、彼女である。將軍秀忠が次男の困千代を愛してそれに家督をつがせようという気配をみせたとき、春日局は反対し、駿河に隠居中の家康に拝謁し、事情をのべ、ついに家光をもって將軍職の相続者にしたはなしは有名である。のち、家光はお福の功を嘉し、その夫正成を大名にしようとしたが、正成は「女房の縁で立身しよう」と

はおもわぬ」といってことわつた。このためその子稲葉正勝がとりたてられ、諸侯に列した。

それが、まだうまれておらぬとはいへ、菜々のめいにあたる。菜々といい、お福といい、この家の女系には思いきつた性格の血がながれているのかもしれない。

さて、内蔵助である。

「いそぐはなしではない」

と、菜々を、むしろなだめるようにいった。今夜一晩、よく考えてみよ、というのである。

この縁談のいきさつがおもしろい。

明智光秀にはかれの履歴中、

——武者修業

という歳月がひどくない、ということはずでに述べた。

堺の商人にも、知人が多い。その商人のなかで、**穴食屋**という奇妙な屋号をもつた男がいる。穴食という地名が、阿波と土佐の国境近くにある。ふるくからの商港である。穴食屋はこの地の出身で、堺に出て唐物や諸国の物産をあつかう貿易家になった。出身の関係から、土佐の長曾我部氏が最大の得意先であり、土佐物産を買ったり、鉄砲を売ったりしていたが、あるとき、土佐へゆき、長曾我部元親に拝謁し、よもやまの話をした。自然、話題は中央の英雄豪傑のはなしである。

「美濃岐阜に本拠をおもちあそばす織田信長公こそ、ゆくゆくは天下のぬしにおなりあそばすのではないかと存じまする」

と、穴食屋はいった。このころ、信長はまだ美濃に進駐したばかりで、京への通路である近江をさえ取っていない。この時期の信長をそのように観測した穴食屋は、いかに情勢にあかるい堺商人とはいへ、相当な人物といつていい。

元親は、このとき二十五歳である。土佐一國ですらまだ平定していなかったが、気概があり、将来の大を、みずから期していた。

「その織田家と、よしみをむすぶ方法はないか」

といった。元親は、相手の信長と自分のさきものを、ともどもに買おうとしたといえる。

「美濃はなるほど遠い。しかし唐土の書物に、遠交近攻策ということが書かれている」

遠國と同盟し近國を攻めるといふ戦國の外交策である。まだ成長しきらぬ長曾我部氏の現状ではそれは必要はなかつたが、将来、四國全土を切りとれば、さしあたつて瀬戸内海をへだてて中国地方の毛利氏と衝突することにならう。それをおもんばかればいまから織田氏となんらかの縁を結んでおくほうがいい。

すぐ思いつくのは、婚姻である。元親は最初の妻を死なせて独り身であつた。かといつて織田家の姫君をくれ

といつても、信長は遠国の一土豪にすぎぬ長曾我部氏などにはその家族の女をくれぬであらう。

「織田家の家中の娘で、これはという者はおらぬか」

といった。宍食屋はひざをたたき、岐阜城下随一の容色といわれた斎藤内蔵助の妹をおもいだしたのである。

宍食屋は商用で岐阜へもゆく。城下で菜々の評判をきんざんにきいてもいた。

それに、宍食屋は、織田家の新参の明智十兵衛光秀と懇意である。斎藤内蔵助と明智家とは美濃で縁戚のつながりになるといふことも知っている。さらに宍食屋は、人材重視の織田家にあつては光秀の将来は洋々たるものであることも見ぬいていた。あの斎藤内蔵助の妹を長曾我部家がもらえば、ゆくゆく、織田家との関係がよほど便利なものになるにちがいない。そう観測し、そうすすめた。

「頼む」

元親は、いった。

宍食屋はすぐ土佐を出発し、海路陸路をへて岐阜城下に入り、明智家をたずねてきたのである。それが、きのうのことであつた。

「なんと遠大な」

光秀もこのはなしをきき、この縁談を思いついた宍食屋と長曾我部元親の発想と構想の大きさに、息をのむおもしろいとした。

この美濃から、遠国の土佐に興入れするなど、世にもめずらしい、およそとつぱな、ほとんどおとぎばなしに近い事象だが、明智光秀の感覚には、そう思われぬらしい。ゆらい、非常な秀才ではあるが、滑稽を解する感覚にとぼしい。

きまじめなのである。隣家の斎藤内蔵助から、

「菜々は、嫁くと申す」

という返事をきいたときも、

「それはそれは、めでとうござる。善はいそげ、とか。さっそく殿様に申しあげ、おゆるしを頂戴することにしよう」

と、動ずる気配もなく、さっそく縁談を事務化すべき話題に入った。

翌日、光秀は登城し、とくに信長の内謁を乞い、この話をした。

「土佐から、わが家中に嫁を？」

と信長は問いかえし、あとはしばらくだまつた。さすがの信長も、事の突飛さにおどろき、とつきには信じがたいらしい。

信長は、まだ尾張と美濃、両国の国主にすぎず、いわば田舎大名にすぎない。もつとも当人はすでに天下に志があり、岐阜の僧に文字を撰ばせ、

天下布武

という印形をつくり、公文書にはすべてこの判を用い

ではいる。しかしひろい世間での信長の評価はどうであらう。当節、天下でうんぬんされる勢力といえ、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、中国の毛利氏、京の三好氏などがそうで、一格落ちて奥州の伊達氏、美濃の織田信長というところであらう。その信長を目して、

——ゆくゆく天下びとたるべきひと。

として、その家中の娘を嫁にほしいといってきたのである。それも海一つへだてた土佐の土豪が、である。光秀の説明をきき、おおかたの事情がわかると、信長はひどく上機嫌になった。

(おれを、そのように見たか)

それが、信長にとってうれしかった。

「土佐の長曾我部元親とは、いったいいくつだ」

「殿よりも御年が六つ下か、ということでございます」

「ふむ、まだ若いの」

まだ見ぬが、自分をそこまで評価してくれたとなれば、可愛ゆくも思える。

それにしても、長曾我部元親などという遠国の豪族の名を、たれが知っているだろう。信長はそう思い、すぐ近習の衆を十人ばかりよびあつめて、ひとりひとりにきいてみた。一人だけが、かろうじて知っていた。

「やれやれ、物知らずめが。おれがのちのち四国を征伐するときはよき敵になる男の名ぞ。おぼえておけ」

と、信長は声をたてて笑った。

「しかし」

信長はくびをひねった。

「その斎藤内藏助の妹の菜々とやら申すむすめ、よく承知したの」

急に、信長はその菜々に興味をもちはじめた。

「内藏助が、説き伏せたのか」

「いえいえ」

光秀がくびをふった。

「菜々が、すすんでゆく、と申したのでございます」

「かわった娘だ」

信長は、大声でいった。

「ぜひ、連れて来い。引出物もとらさねばならぬし、その娘の顔がみたい。醜女か」

「どういたしまして」

光秀が菜々の容色を述べたから、信長はいよいよ興味をもった。

翌日、菜々は兄の内藏助にともなわれ、お城へのぼった。

手続きがある。そのうるさきは江戸時代ほどではないが、それでもすぐに拜謁の間まかり出るといふわけにはいかない。城内に、家老の柴田勝家の屋敷がある。そこが、仮りの装束屋敷になった。

そこで髪や衣服をととのえているうち、黒沢という老